

『健康人間学プロジェクト通信 1』(1987年10月26日, 石井誠士)

—— 健康人間学研究会発足資料 ——

去る10月21日の教員会議で、企画委員会の濱委員長から三つの学内研究プロジェクトおよびそのコーディネーターが発表されました。私は「人間学」の纏め役を托されたのでありますが、非力ながら、なんとか皆様の共同の研究推進のために頑張りたいと存じます。よろしくお願い申し上げます。

委員会からは唯「人間学」と言われたのでありますが、私としましては、本学部の新学部構想や過去及び将来のこの分野の学問のことを考えまして、はっきりと「健康人間学」と呼ぶことにしてよいのではないかと思います。

しかし、新しい学問が成立するためには、先ず1)その学問が何を対象にし、どういう方法で研究するかを明確にするのでなければなりません。また、2)その学問領域のこれまでの研究成果や現在の研究状況をその新しい学問構想の中に組み入れ、秩序づけていくことをしなければなりません。しかし、それら以上に重要なことは、3)今有るスタッフで可能な限り、その分野の研究を一分担したり協働したりしながら一進めていき、実績を積み重ねることです。

以上三点について私見を述べさせていただきます。

I. 「健康人間学」の対象、方法および定義

「健康人間学」の対象は「健康」とその諸問題、その方法は広義の「人間学」あるいは「人間科学」anthropology or science of man の諸方法である。

我々は「健康人間学」をとりあえず「健康とその諸問題との人間学的ないし人間科学的研究」と定義してよいであろう。

その際、「健康」をどのように考えるかとい

うことも大きな問題である。実はそれを根本的に問い直すことも「健康人間学」の課題をなすのであるが、ここではそれはアングロサクソン語の health, あるいはドイツ語の Heil の内容を展開したと見られる WHO の定義で考えておいてよい。あの定義はよく引用されるが、まだあまり正確に捉えられていない、案外ごく表面的に—その深さと革新性が看過されて—受けとめられているのではなかろうか。

「人間学」ないし「人間科学」については、我々はこれを、今日一般にそうであるように、哲学、倫理学、宗教学、歴史学、心理学、自然人類学、文化人類学等から社会学に至るまで幅を持ったものとして、つまり人間を対象とする学の総括として考えたい。そうすると、医療分野では、看護や作業療法は本質的に「健康人間学」の中に入ってくるものではないであろうか。

「健康人間学」は「健康科学」の根幹をなす分野である。それだけに重要でもあれば難しくもあるが、我々は「健康人間学」とは何かと問う、あるいは、それについて様々な空論を並べるよりも、先ず実際に自分でやってみることが大切なのではないか。現実の要求に従いつつ、人類の未来を見通して、ともかく自分でやってみる、自分でやってみて、これが自分の「健康人間学」だ、と他人にも、また学会にも提示することができるようになる、そういう勇気を持つ、それがこういう学問を創り出してくるのではなかろうか。

そういう意味では、厳密に言う、我々はまだ「健康科学」とか「健康人間学」とかを言いうところには来ていない、と言わねばならない。凡そ形式だけの学問ほど抽象的な、空虚なものはないのだから。

Ⅱ. この学問領域の過去と現在

1. ドイツの「医療人間学」medizinische Anthropologie
哲学と医学の中間を問題にする。
2. アメリカの「医療人類学」medical anthropology
 - 1) 自然人類学者の関心。例えば進化、適応、比較解剖学、人種、遺伝学、血清学等の自然人類学的研究。
 - 2) 文化人類学者の関心。呪術や魔術をも含めた未開医療の文化人類学的研究。
 - 3) 人類学者と精神医との共同研究による「文化とパーソナリティ」の研究(主として1930年代後半から1940年代にかけて)。
 - 4) 第二次大戦以降の国際的公衆衛生運動に伴う諸研究。
 - 5) 患者や病院や医療専門職(医師や看護)に関する最近の行動科学的研究。
3. 「医療社会学」
医療への社会学的アプローチ
4. 「医療心理学」
医療への心理学的アプローチ

Ⅲ. 我々の学部での共同研究の可能性

我々の学部には専門の「健康人間学」研究者はまだ一人もいない。しかしⅠで述べたことからすると、ここで医療技術といているものは

ほんとうは「健康科学」でなければならないし、「健康人間学」はその根幹をなすものであるから、成員の誰もが、視点を WHO が言っているような意味での「健康」に、人間の深い「全体的な自己充実した在り方」complete well-being に置いて自分の研究を展開していくならば、どのような分野からでも「健康人間学」が成り立ってくると思う。医学も看護学も、あるいは哲学や心理学も、それだけでは「健康人間学」にはならないが、そこに一つ「健康」の視点が加わって、これまでの研究をその根本的な視点から見直し新しい学問構築をしていくとき、「健康人間学」になってくる、このように理解される。

研究の具体的な進め方としては、定期的に勉強会や研究会を持つことも考えられる。少なくともお互いの間に、「健康」や「人間学」について最少限の明確な共通認識を持つことは必要であり、そのための会合は持たなければならないであろう。しかし、その明確な共通認識の上に立つ限り、研究遂行に当たっては、常に各メンバーの研究の自主性と独立性とが確保されてあるべきである。つまり、「研究プロジェクト」は共同の事業であると同時に、各研究者の研究の新しい発展への道を拓くものでなければならない。それから、研究成果は近い将来にまとめて出版することになろう（「健康人間学研究論文集」）。